

ひんやりと下萌え圧さえし手で触れる養蜂箱に分蜂の熱  
やわらかきレンゲの丈に戻されて頼りなきほど長靴の跡  
分蜂の翅音の渦に透けている春の雲間に機影の音なく  
蜂飼いは北を目指してこの国の暦の上に花を絶やさず  
海の上にブラキストン線またぎつつ桜前線追いかけてゆく  
サービスイリアにエンジン切れれば百箱の翅音ひとつにさざめいて星  
流蜜の音を頼りにカーナビを消して新たな聖地巡礼  
アカシアの風へ移りし蜜蜂に少し遅れて追いつく翅音  
捨て蜜に粘る指ごと舐める時もっとも甘きはちみつとなる  
教室に正しく揃う木机のように並べる養蜂箱も  
養蜂着を祖父も使いし枝にかけ昼餉のあとの小さき欠伸  
女王蜂、ばるんばるんの腹にして夏の滴り享けたる器  
水たまりを楕円に象りふくふくと水呑む蜂のみな前のめり  
幸せの四つ葉のクローバー蜜の終の雫は琥珀のふくらみ  
逆さまにはちみつ透かす壇底に気泡が届くまでのとこしえ